



「モラル・エッセイ」コンテスト最優秀作品

県教育委員会では、毎年「モラル・エッセイ」コンテストを行っています。今回ご紹介するのは、平成27年度の部門別最優秀作品です。次は、みなさんの心温まる体験談やすてきなエピソードを、ぜひお聞かせください。

中学生の部 「ランドセル」

会津若松市立第二中学校 1年 伊藤 要

平成23年3月11日、ぼくは富岡町に住む小学2年生でした。小学校で帰り支度をしている時に、東日本大震災が起きました。原発事故もあり、ぼくたち家族は、母の実家のある会津若松市に避難しました。まさか長期の避難になるとは思わなかったもので、持ち出した生活用品もわずかなものでした。ぼくの学用品も全て富岡町の小学校に置いてきたままでした。

新年度から会津若松市の学校に通うため、教育委員会に母と行きました。手続きが終わると、ある部屋に案内されました。その部屋に入ると、たくさんの学用品が積まれていました。ノートやえんぴつなどの文房具や、絵の具のセットなどが、日本中から支援物資として集まっていた。その中にランドセルもありました。ぼくが選んだランドセルにはプロ野球チームのシールがはられてありました。6年間使用している間についたであろう細かい傷もありましたが、まだまだ使えるものです。ぼくは「どんな子が使っていたんだろう。野球が好きな子なのかな。」と頭の中で想像しました。そして、一度も会ったことのないランドセルの持ち主の子ですが、友達になったような気持ちになり、「ガンバレ」と応援されているように感じました。ぼくは、その支援物資として届けられたランドセルを背負い、始業式の日には転校先の学校へ向かいました。友達は一人もいないし不安だらけでしたが、ランドセルを背負った背中が、なぜか温かく感じ、まるでランドセルに励まされているかのように感じました。

あれから4年、会津若松市での生活にも慣れて毎日元気に過ごしています。一度も会ったことのないランドセルの持ち主の人に、ひとこと言いたいです。

「あなたのおかげで勇気ができました。本当にありがとう。」

高校生の部

「これからも私は、沢田応援団」

福島県立白河高等学校 1年 野内 佳奈

昨年8月、私たちの中学校は文化祭を2か月後に控えていた。この文化祭に対する私たちの思いは特別なものだった。当時中学3年生だった私たちにとって最後というだけでなく、私たちの中学校としても最後だったからだ。

沢田という小さな地区にある私たちの中学校は、全校生がわずか49人。今年の3月には統合のため、閉校を迎える予定だった。そのため、長い歴史のフィナーレを飾るのにふさわしい出しものを考えている時のこと。

「全校生で応援団をやってみねが？」

校長先生のこの一言は、まさに鶴の一声だった。中学校が閉校を迎えるとあって、沢田地区の雰囲気はどこか沈んでいた。その沢田を元気づけられるのなら、と私たちは意気込んだ。

応援団の練習は朝の時間、そして昼休みを利用して毎日行われた。校長先生自ら応援団の指導にあたり、その熱意に引張られるように私たちも練習に打ち込んだ。

そして迎えた文化祭当日。沢田地区からは、地域の方々をはじめ、歴代の卒業生が学校として最後の文化祭を見届けに来ていた。

「がんばれえー、がんばれえー、さあーわあーだあー！」

体育館中に響きわたるような声を張り上げながら、49人はそれぞれタイミングを計って振り付けを揃える。そうやって激励しながら、私は自分たちはいつも沢田地区の方々を支えられてきたことを実感していた。通学時の「いってらっしゃい」や夏休みの資源回収の時の「暑い中ご苦労さま」の声は、どこかくすぐたく、温かかった。

全校生による応援終了後、体育館は盛大な拍手に包まれた。涙を浮かべている人もいた。こうして最後の文化祭は大成功で幕を閉じたが、私はこれからも沢田を応援していきたい。地域の行事に積極的に参加するなどして、沢田をもっと元気にしていきたいと思う。

一般の部 「ふるさと」

大塚 由美

青竹色の空、山鳩色の雲。萌木の風、青丹の山、そして常磐の光。ここには、そんな緑色があふれている。この色に包まれているだけで身も心もほぐれていく。そんなかけがえのない場所がある。

大学を卒業し、学友たちは皆それぞれの人生を背に故郷へと帰って行った。私はある決心があり、一人灰色の東京に残った。ふくらむ夢とは裏腹に折れそうになる心を抱えての日々だった。

アルバイトを終えての帰り道。商店街のアーケードの一角。いつもの重い足取りがそこでぴたりと止まってしまった。小さな八百屋の前だった。おいしそうに並んだ赤いトマト。そして、一段高い位置に置かれた高級そうなトマト。「特別おいしいトマト」と添えられ誇らし気に皿に乗っていた。高価で手が出ないと思いつつも、その鮮やかな赤に私は目をうばわれていた。そして次の瞬間、あふれ出た涙の向こう側に見えたのは、「南郷トマト」の文字だった。なんでと問われると答えられないけれど、涙が止まらなかった。

我が故郷は南会津の小さな農山村。トマトの里南郷である。

翌日、故郷の母から地元で栽培された尾瀬りんどうの花が送られて来た。凜として青いその花は、なつかしいふるさとの香りがした。